

「英雄」になれぬ女性兵



上

端に寒く、極端に暑い。砂があらゆるものにまとわりつき、想像を絶する地だ。ヘルマンド州は反政府勢力のタリバンが強い地域。入隊後に学んだパシュトゥン語を駆使して、現地の人と会話を重ねるのが自分の任務だった。

アフガンの女性たちは、女性の社会進出を認めないタリバンの時代に戻ることを恐れていた。「夫や子どもはいるの」と聞かれ、独身だと答えると驚かれた。軍務はアフガンの人を助けるため、自ら選んだ道だと伝えたと、もっと驚かれた。女性が軍隊の中で任務を持ち、こなしていることが、アフガンの女性には信じがたかったようだ。

自爆テロ

悪夢続く

突然、車が衝撃で揺れ、火に包まれた。自爆テロの車が突っ込んできたのだ。脳振盪と右半身のやけど。チェイスさんはこの「戦功」で勲章を授けられた。

この年の2月から10カ月間、アフガンに駐留した。極

悪夢にうなされ、隣で寝ていたボーイフレンドに「寝ている間に殴られた」と聞かされた。記憶障害が激しく、メモ帳が手放せない。自分の車をどこに駐車したのか覚えられず、どうやって帰宅したのか分からないこともある。

それでもチェイスさんは、

上官から

セクハラ

オバマ大統領が先週、打ち出した増派戦略には賛成だという。「アフガン再建には女性の自立がカギ。米国の女性兵士がアフガン女性を支援する任務を増やしてほしい」



イラクに赴いたケイラ・ウィリアムズさん(右) 03年春、本人提供

女性帰還兵

5月までに退役軍人省に保護措置を求めた女性帰還兵の15%が暴行やセクハラを訴え、イラクとアフガニスタンでは、08年の1年間だけで163件の暴行事件が報告されたという。

ケイラ・ウィリアムズさん(33)の場合、学費をかせぎ、と陸軍に入ったのは00年。「まさか戦争になるとは思っ

ていなかったから」。だが、入隊後に身につけたアラビア語の専門家として、03年3月に開戦したイラクの戦場に赴くことになった。

バグダードから地方に向かった20人の小隊で、女性は自分だけ。男たちと同様、山中腹で寝袋にくるまった。同僚が性的な話をしてきたとき、仲間として接してくれているのかも知れない。

しかし、イラク駐留が長くなるにつれ、規律は緩くなった。半年後のある夜、見張り番で立っていると、交代の兵士が自分の局部をさらし、さらせようとしてきた。階級が一つ上の男だ。翌日、謝罪してきたが、仲間には「女の方から誘ってきた」と言っていると聞き、頭にきた。「明らかに一線を越えていた」

セクハラ行為が起きるたび、「男のキャリアを傷つけないでくれ」という声が聞かえてきた。自分は仲間の一人ではなく、絶えず「女」として見られていると思うようになった。「敵がいつ襲ってくるか分からないという心理的負担に加えて、同僚による暴行の恐怖が続いた。ミスを

しても個人の問題として扱われず、「だから女は」と言われる。必要以上に身構えた。ウィリアムズさんは「女性は帰還兵として認められないのもつらい」と話す。昔の部隊仲間と飲み会に出ても、男たちが店の経営者から一杯おこられるのに、自分だけはガールフレンドの一人と誤解され、対象にならない。「まるで透明人間のような扱いだ」

チェイスさんも、女性帰還兵が置かれる厳しい環境改善のために団体を立ち上げた。女性は歩兵部隊に所属することを法律で禁じられている。チェイスさんのように勲章を持っていない限り、戦闘にかかわったことを証明するのが難しい。戦場帰りの「英雄」に与えられるはずの福利厚生措置の網から漏れる女性帰還兵は少なくない。

(ニューヨーク 田中光)

オバマ大統領がアフガンistanへの増派策を発表した。イラクとの二つの戦場で最前線に立つ兵士の負担はますます重くなっている。疲弊し、苦悩する帰還兵たちの姿を追った。

心の戦終わらぬ中東系

疲弊する米兵

中

アラブの血を引く中東系だが、米国で生まれ育ち、米国を愛する米国人だ。ところが自分が築き上げてきたものを「いっぺんに否定されたような気がする。ニュースも見たくない」。2003年と04年の2回、米海兵隊上等兵としてイラクに駐留したラジャイ・ハキさん(28)は、11月にテキサス州の陸軍基地で起きた乱射事件について語る時、声が一段と大きくなる。ハキさんの両親はシリア出



ラジャイ・ハキさん(右)は、イラクに2度派兵された。イラク、本人提供

身。乱射で13人を殺害した容疑者は、同じように中東出身の両親を持つイスラム教徒だった。事件前、イエメンのイスラム原理主義者にメールを送っていたことが明らかになった。「イスラム教徒は軍隊から追い出せ」といった極論まで聞かれるようになった。「米国は、イスラム教徒、

あるいはアラブ世界全体を敵にして戦っているわけではない」。ハキさんはそう話す。米軍140万人の現役のうち、イスラム教徒であると申告しているのは3500人。1%にも満たない。

ハキさんが海兵隊に身を投じたのは、「自分が米国人であることを証明したかったから」。01年9月11日。同時多発テロが起きたとき、首都ワシントンにあるアメリカン大学の学生だった。自分は直接、差別の対象にはならなかったが、ニューヨークの親類は見知らぬ男に襲われた。

「中東系はみんなイスラム原理主義者であるかのように扱われるのは、自分としては許しておけなかった」

医師の父を持ち、不自由なく育った。父と同じ道に進ませようとしていた母は、軍に入ることに泣いて反対した。イラクではナシリヤやファ

ルージャなど激戦を経験。アラビア語の通訳として様々な尋問に立ち会った。さつきまで仲良く話していた地元住民の家に押し入り、捜索をしたこともある。

しかし、同僚たちが、「巡礼者」という意味のアラビア語にちなんだ「ハジ」という差別用語を、地元の人々に発するのを耳にしたときは、何とも言えない感覚に襲われた。第2次世界大戦ごろに日本人を「ジャップ」と呼んでいたような、さげすみの呼び名だ。仲間の自分に対する視線も疑うようになった。

帰国後、母校で話す機会があった。「お前は民族の裏切り者ではないか」。そういう問いかけも経験した。「何のためにイラク戦争に参加したのか」。過去を振り返る時、気分は晴れない。

(ニューヨーク＝田中光)

脳に後遺症 また戦地へ



下

装甲兵員輸送車両ハンビーの前後で、仕掛け爆弾が爆発した。頑丈な車体がくの字形に曲がるほどの衝撃だった。後部座席にいたスパンさんは、右後頭部に直径2センチほどの破片が突き刺さり、一時は意識を失った。

ワシントンのジョージ・ワシントン大に通う元海兵隊員ウエード・スパンさん(26)は、その日にすべきことを細かい字で書き記した小さなメモを、財布の中にいつも忍ばせている。思ったことを、すぐに忘れてしまうためだ。

この大げがの後、もの忘れが激しくなったと感じたが、軍医の説明は「激しい脳振盪」。その翌年、3度目のイラクに赴いた。

米国に帰った05年、日常生活の中でトラブルはますます大きくなった。アルバイトの時間変更を忘れ、大学で習ったばかりの数学の問題が全く思い出せなかった。不可解に

思ってしまった。精密検査の結果、外傷性脳損傷(TBI)による記憶障害との診断が下った。

「おかしくなる兵士がいても以前はだれも分からなかった。支援も全くなかった」。ジョージ・ワシントン大退役役軍人会のホーソン部長(米議会担当)は、そう指摘する。焦点が当たり始めたのはごく最近だ。同会は治療への支援拡大を米政府に働きかけており、治療費は総計で数十億に上るとの試算もある。

対策が間に合わなかった仲間もある。スパンさんの海兵隊時代の親友の一人は、自殺した海兵隊員の葬儀に参列した直後、自らも命を絶った。TBIや心的外傷後ストレス障害(PTSD)と思われる症状が出ていたが、診療を受けていなかった。

スパンさんは最近、ワシントンに隣接するメリーランドの陸軍州兵として、予備役ながら、再び軍に戻った。イラク行きを3度にわたって経験した彼が、今度はアフガニスタン行きを希望している。「いま問題をかたづけたいと、孫の代まで戦わないとまらないから」と説明する。

だが、個人的な事情もある。不況で失業率が10%に達して米国では、いまや良い仕事を探すが難しい。だから脳に後遺症をかかえたまま、それでも戦場に向かう。

(ワシントン＝望月洋嗣)